

〔種梅記碑〕

種梅記碑

予自少愛梅。庭植数十株。天保癸巳始就国。國中梅樹最少。南上之後。每歲手自採梅実以輪於国。使司園吏種之偕樂園及近郊隙地。今茲庚子再就国。所種者鬱然成林開華結実。適会弘道館新成。乃植数千株於其側。又令國中士民每家各種数株。夫梅之為物。華則冒雪先春為風騷之友。実則含酸止渴為軍旅之用。嗚呼有備者无患。数歳之後。文葩布国。軍儲亦可充積也。孟子不云乎。七年之病求三年之艾。可不戒哉。聊記以示後人伝。

天保十一年歳次庚子冬十月

景山 撰文並書及篆額

（訓読文）

予（われ）少より梅を愛し庭に数十株を植う。天保みずのとみ、始めて国に就く。國中梅樹最も少なし。南上の後、毎歲手自ら梅実を採りて以て国に輪（いた）し、司園の吏をして之を偕樂園及び近郊の隙地に植えしむ。今茲（ことし）庚子（かのえね）、再び国に就く。種（う）ゆる所のもの、うつぜん林を成し、華（はな）を開き実を結ぶ。たまたま弘道館新たに成るに会う。則ち数千株をその側に植え、又国中の士民をして家毎に各々数株を植えしむ。夫れ梅の物たるや、華は則ち雪をおかし春に先きんじて風騷（ふうそう）の友となり、実（み）は則ち酸を含み渴を止めて軍旅の用となる。ああ備あるものは患（うれい）なし。数歳の後、文葩（ぶんぱ）国に布（し）き軍儲また充積すべきなり。孟子曰わずや、七年の病に三年の艾（モグサ）を求むと。戒めざるべけんや。いささか記して以て後人に示すという。

（大意）

わたくしは少年のころから梅が好きであった。天保四年（一八三三）はじめてわが領地に來たときには、領内に梅の木はまれであった。江戸へ上ってから、毎年みずから梅の実を採って国へ送り、偕樂園などに植えさせた。七年後の天保十一年ふたたび国へ帰ってみると、先に植えさせた梅は生長し、花を開き実を結ぶにいたっていた。ちようど弘道館が新たに造られたに際し、数千本をその周囲に植えさせた。梅の花は春に先がけて咲き、文人たちをよろこばせる。実は酸をふくみ、のどのかわきをいやし戦に役だつ。備えあればうれいなし。数年後には国中に美しい花が咲きひろがり、兵糧も貯えられる。孟子はいったではないか。七年間の持病を治すため、三年間かわかしてよく効くもぐさを採しているようなものだ。戒めとしなければならぬ。

（参考文献『水戸の梅と弘道館』）